

コラージュ制作を活用したシェアリング・グループの体験過程

ー臨床心理センターの活動グループ「テクミン・タウン」での取り組みー

布施川貴子、小野薫、郡司真由美、東原僚亮、白瀧麗子、山科 湖、牧 裕夫

1 問題と目的

「テクミン・タウン」とは本学の学生支援である「れいんぼーさろん事業」の中で集団場面を活用した支援事業名である。平成 29 年度では「テクミン・タウン」は本学大学院の教育課程における学習グループ「まなび～」と居場所支援グループ「サクミンズ」等といった活動グループの一つとなった。平成 29 年度から、従来の学生支援での体験から、集団場面での参加者の近況報告と相互のシェアリングによるセッション（以下、センター・グループ）を、臨床心理センターでの利用者に対して試みている。

主に不登校の課題を有する青年期のクライアント（以下、C1）を対象として、昨年度から高校生女子と中学生男子といったC1に対して実践を継続している。

今回、シェアリングによるセッションを不登校等の課題を有する青年に適応した経緯として、斎藤（2012）の「ひきこもり」に対する報告によるところが大きい。斎藤は精神分析的な視座に立ち、エディプス体験にみるように、父親や母親の欲望を伴うメッセージが無意識的に取り込まれる点に着目し、人は自身の欲望を生きていないと指摘する。すなわち、自身の社会に対する態度を変える為には他者の欲望に接するしかないとする。斎藤はひきこもりに対応する為には、やはり様々な他者と対話することが重要であるとする。

斎藤（2015）は同じ、他者との対話を重視する視座からオープンダイアログの実践を紹介している。フィンランドにおいて統合失調症者を対象にしたグループである。このグ

ループの構成としてC1一人に対して保護者と共に2名以上の医療スタッフ等を配置している。センター・グループでもC1でも一人に対し保護者と2名以上のスタッフで実施している。センター・グループでも初回から2回位保護者も参加している。

センター・グループでは、対話での外在化の媒体としてコラージュ制作を継続して実施している。中島・岡本（2006）では制作者に個別に5回の継続作成における心理的体験の変化過程について、対象者の報告をもとめ質的に分析している。内的過程として3つの次元「拡散次元」「統合次元」「再構成次元」とコラージュ制作に対する取り組み姿勢として2つのタイプ、制作者の内的世界を表現しようとする「内的作業型」、作品の見た目の美しさを対教する「切り離し型」をあげている。この2つの取り組み態度のいずれも、制作に係る3つの次元にそった次元の深まりがあることが報告されている。

コラージュ制作後に言語による作業を進める試みとして大前（2012）の報告がある。C1に対して、制作した作品を基に物語の作成を求める。その内容に含まれた自動思考への気づきから、認知変容を試みている。以上は個人がコラージュ制作を継続実施する報告である。

個人ではなく集団において、コラージュ制作から、さらにシェアリングによるアプローチとして竹内、寺崎、武井、門田（2015）の報告がある。シェアリングではお互いの作品について批判ではない発言である。その結果として参加者の気分ポジティブな変化をもたらすことが示された。シェアリング時に参加者

間の相互の共感や関心が高まり、参加者間のコミュニケーションを促進する可能性が示唆されている。青木（2009）は円形の台紙を用いたマンダラ・コラージュ制作を集団場面で継続制作を求め、言語を用いたシェアリングを行っている。その結果、他者を理解することのみならず、ぼんやりとした現在の生活に目を向けさせ、自身の問題点を明らかにし、将来に向けて何をすべきかを切片を通した視覚的理解を促していたとし、さらに自身の客観視を可能にすることも明らかにした。

本報告では、臨床心理センターで行われた不登校の青年を対象としたセンター・グループでのスタッフ側のコラージュ制作体験を対象としている。センター・グループではA5判の台紙で新聞を材料とし、紙片枚数を指定している。先行研究と異なったこれらの設定での体験過程について検討を試みる。

2. 検討の方法

センター・グループに参加したスタッフのセッション体験を対象にしたレポートのプロトコルを対象とした質的研究である。

セッションの構造：C1とその保護者とセラピストである、リーダーと2or3人の院生による、90分のコラージュ制作を主とするシェアリング・グループである。前述したように集団で実施する効果としてエビデンスあるコラージュ制作を行っている。その際、90分の相談時間の中でシェアリング時間等の確保の為、コラージュの台紙サイズを小さくし、かつ貼り付ける紙片の数を制限した。

コラージュ制作はマガジン・ピクチャー法であり、切片の材料は新聞を用いている。台紙はA5判である。各メンバーにスティック型の糊とハサミを配り、「新聞紙の写真、イラスト、文字等を切り抜き、台紙に貼り付け作品を制作してください」と教示している。時間については特に指定していない。制作時間はおおよそ20分位であった。

ちなみに、不登校に関する2事例ではそれ

ぞれ4セッション、5セッションが行われている。C1の二人は共に半年を超えた不登校状態であったが、それぞれのセッションの中で短期で復学している。

スタッフ個々に制作したコラージュ作品をパワーポイントにて画像原稿を作成し、スタッフ個々に配布した。スタッフに以下のリサーチ・クエッションを呈示し、自由記述にてレポート回答を求めた。リサーチクエッションとしては、①制作過程で体験したこと、②集団で進めていることから体験したこと、③繰り返し制作したことから体験したこと、④制作したことから気づいた自身のこと⑤新聞を利用したことから体験したこと、⑥紙片を限定したことから体験したこと等である。

3. 結果

リサーチ・クエッションにそってどのようなプロトコルが得られたかを示し、5判新聞コラージュを用いたセンター・グループの体験過程について考察する。以下2セッション以上体験したスタッフ5名からのプロトコルを示す（各プロトコルの最後の括弧内に示されたY、H、O、G、Sはその5名である）。

①制作過程で体験したこと

- ・悩みつつでもあるがコラージュを完成させ、そのコラージュがとても愛おしく思えた(H)
- ・他のメンバーの作品の影響もあったが、結果的には自分らしい作品に終結できて安心した(H)
- ・初めての作成ということもあり、自分自身の内面を晒すという印象が強く作成にあたって困難さを感じた(O)
- ・できたら晒したくないという気持が支配(O)
- ・切り取る過程で、印象が強く惹かれたものを7枚ほど切り取る(O)
- ・切り取ったものをストーリーとして作って組み合わせという感覚であった(O)
- ・猫が友達をつれて旅にでかけるというストーリーということもあり左上から右上、左下から右下へと絵が展開する配置となった(O)
- ・切り抜きと切り抜きの間、空白が多くあった(O)

- ・チラシなので新聞のカラー写真よりも鮮明な色。紙面全体に花がモチーフのネックレスの写真を選択 (0)
- ・上部左側にスターウォーズの宇宙船、上部の右側に人工衛星、下部左側にスターウォーズの敵のキャラクター、中央部に合唱団、右側にチョコレートを配置 (0)
- ・下地に円形のピザが20枚。模様のように規則正しく並ぶ。中央部左側に時計と車。右側下部に男女の写真 (0)
- ・アイテムの配置方法に変化が生じて、空白部分が埋められている (0)
- ・色使いや配置、切り方の工夫など新たな手法を取り入れた (0)
- ・人物の写真には縦書きで、「リストラ」「熟年離婚」「パワハラ」「就活浪人」などの文字。中央部下方には植物の温室。今回も前回同様に紙面全体に下地を貼り付け (0)
- ・アイテムを重ねる手法をとった (0)
- ・初めて文字を登場させた。まさに、社会を構成する、さまざまな年代の人物、都会と田舎を表現した (0)
- ・文字で示されて様々な問題が渦巻いているというようなものを表現したかった (0)
- ・ブルーを基調に上部に富士山 (青い山肌、青空) を下地とする (0)
- ・右側から紙面の5分の1を占める形で都会のビルと青空。中央に千羽鶴のオブジェ。中央やや左側に青空に浮かぶ水色のヘッドフォン、中央下側に夜空 (深い青)、中心に紺色のブランドもののバッグを模様として使用 (0)
- ・人物は登場していない (0)
- ・全体的に水色、完成後にふりかえると、中心部に置かれた紺色が異質である (0)
- ・異質と感じつつ、空間の中心に置かれていることは、バランスがとれていることとも思われる (0)
- ・ストーリーを考えるとという行為は、意識的なものであると思う (0)
- ・辻褄があわなければコラージュ作品を作成することができない (0)

- ・ストーリーを考えようとする過程がある (0)
- ・デザイン重視になることは、無意識を表現しているように思った (0)
- ・作品は、見る人に不快感を与えないような、無難なものになっている (G)
- ・花のある風景。人は登場していない (G)・ブルーグレーの色調が主 (G)
- ・白い滝を右に、祈る人々を左に、なぜかその間に赤い椿 (G)
- ・新聞や人物、文字などは絶対に貼りたくなかったので、広告の「物」のみを貼り付けた (S)
- ・癒しと安らぎの空間を作品に表現したい気持ちが強かった (S)
- ・ホッとできるような部屋のインテリアや観葉植物をメインに貼り付けた (S)

②集団で進めていることから体験したこと

- ・他者を受け入れる温かい時間が流れている (Y)
- ・他のメンバーが作った作品を参考にした (H)
- ・C1の作品が他のメンバーの作品に影響されていく姿を見て、自分も参考に作っていた (H)
- ・「このグループでの自分とは」を体験した (H)
- ・切り方や張り方にさまざまなバリエーションがあることに気づく (0)
- ・自分ではやらないような方法を目の当たりにした (0)
- ・空白部分が多くとられていることに気づく (0)
- ・自身もその手法を取り入れてみようという気持ちや何か工夫をしようと考えて作成していた (0)
- ・他者のアイディアを取り入れて自身の発想を豊かにしたと思われる (0)
- ・時々の自分を作品に反映し、それをシェアリングしてくれるメンバーが心の成長を促進したり補ったりしてくれる (G)
- ・シェアリングはあくまでも作品を通しての比較的安全だ (G)
- ・時間と場所を共有したメンバーの織りなすハーモニーに包まれ優しいセラピーだと体験した (G)

③繰り返し制作したことから体験したこと

- ・「自分とは何か」について整理されていた (H)
- ・全部合わせて振り返ると、特に最後の作品は今

までの作品を集約した内容になっていた(H)

- ・その時々感じていた悩みが整理されて、より現実的に悩みを課題として受け止めていった(H)
- ・前回と同様にストーリー性を重視している (O)
- ・切り方や張り方なども前回とほぼ同じ (O)
- ・ストーリー性をもって、順番に並べられたものから、紙面全面に背景を貼り付け、その上に残りのアイテムを貼り付けるスタイルに変化 (O)
- ・構図の変化が生じている (O)
- ・前回のものを踏襲しつつも少しずつ変わっていくという体験をした (O)
- ・今回は、多くの人物が登場した。幼い子供から老人までの全ての世代の人々を配置しようと考えた (O)
- ・今回の作品では全体に青系の色を配置 (O)
- ・回を負う毎にストーリーからデザイン重視というように変化していった (O)
- ・1回目は、まだグループに慣れていなかったが、3回目グループにも大分慣れてきた (G)
- ・毎回 似たような感じの作品が出来上がり、作品にあまり変化が感じられないことが引っかかっている (S)

④制作したことから気づいた自身のこと

- ・「自分とは何か」というテーマで進めていた(H)
- ・言葉のコミュニケーションだけでなく、作品を作る過程や出来上がった作品を通して自分の内面に気づき(H)
- ・制作していて気付いたのは、見られることを前提として作っていた自分自身についてだった(H)
- ・自分なりの興味関心やアイディアを散りばめて、6枚という限られた枚数の中、自分らしくて好きなものばかりをまとめた感じだった(H)
- ・自分にしかできない作品が出来たと自慢したくなった(H)
- ・日常的に大学内で交流のあるメンバーなので、時には評価されるかもしれないという恐れはあった(H)
- ・自身に柔軟な自由な発想から作業できているのではないかという思いがわき起こった (O)
- ・大型連休開きのセッションであり、心のブルー

なものを表しているのかとも思われる (O)

- ・様々な領域にわたり中心におかれている事から「安定」というものが現されているようにも思う。色が意味することにも興味がある (O)
- ・空白部分の多さに、そして、アイテムを配置する際には順番で1つ1つというような凝り固まった観念に縛られていて自由な発想ができていないことに気づき (O)
- ・自分を語ろうとしていない。当たり障りのない題材 (G)
- ・自分を虚飾するための宝石を貼る (G)
- ・自身のふり返りも容易に簡潔にできるように思った (G)
- ・C1 の存在が私に息子を思い出させたようにも思えた (G)
- ・夕日を受けて茜色にさざめく湖面は、私の年齢相当の心境を反映している (G)
- ・落ち着いた心境が基盤として流れる中に、熱い何かが激しさを含んで表現された (G)
- ・心の安定や世界の平和を願う。一方で人間的な欲望を覚える自分。相反するそれらの感情が統合される途上にある自分を表現したのだろうか (G)
- ・人物の写真1枚。若々しい男性の笑顔の上半身。GWに帰省しなかった息子を慮っての配置か (G)
- ・後に振り返ると余りに多弁で、また変化が明白に読み取れて驚くほどだ (G)

⑤新聞を利用したことから体験したこと

- ・見られることを前提として作っていた自分自身についてだった(H)
- ・自分なりの興味関心やアイディアを散りばめて、6枚という限られた枚数の中、自分らしくて好きなものばかりをまとめた感じだったが(H)
- ・新聞から絵や文字を探して切り取る際に、土台となる厚紙に合わせた大きさに収まるよう(H)
- ・他に切り取ったものと干渉しないようにと気を使っていた(H)
- ・新聞の日付を確認し、内容を飛ばし読みながら進めると、その時の自分を思い出しながら作っていた。それによりアイディアが自然と湧き、一枚一枚選び切り取ったものが愛おしく思えた(H)

- ・白黒の写真と新聞内のカラーの写真を使用 (O)
- ・カラー、チラシを活用 (O)
- ・新聞紙から (6枚) 切り抜くことの良いところは、雑誌のように美しさに重きを置いた写真ばかりでないために、芸術性の追及に走りがちにならないこと (G)
- ・題材が多岐にわたるために関心事が表現しやすいことがあるように思う (G)
- ・新聞独自の抑えた色調も場合によっては心情の表現にフィットする。(G)

⑥紙片を限定したことから体験したこと

- ・6枚に限定されていることから、えらび切り抜いた物を取捨選択して貼り付けた(H)
- ・6枚で完結できるストーリーを考え、その後の紹介で説明できるように準備していた(H)
- ・6枚で、1枚を分割したりできないことから、限られた台紙のスペースへの配置を工夫した(H)
- ・切り取ったものによっては、どの位置に置くか等でコラージュ全体の印象が違って見えるようだった(H)
- ・新聞のどこを切り取ろうか迷った (O)
- ・指定の6枚よりも多くの紙片を切り取り、その中から選ぶという作業が行われた (O)
- ・一番興味をもったもの、選びたいと思ったものを厳選する結果になった (O)
- ・選ぶ難しさはあるものの短時間で作成が可能なので作成回数を増やすことができる (G)
- ・サイズが小さいために、作品から読みとれることも、より絞られるように感じた (G)
- ・フルサイズの場合には、さまざまなテーマが現れ、ひとつひとつのテーマが薄くなるのではない (G)

4. 考察

(1) 体験過程

「悩みつつであるが」「何を作っているのか戸惑った」とのプロトコルが数名から報告されている。一方で、その戸惑いの中での作品に対して「愛おしく思えた」「最初に思ってもいなかった作品となった」と少なからず報告されている。不登校時は「学校に行くなんて

とても難しい」から「意外と試してみたら学校にいけてしまった」といった経過である。数名から「戸惑いが少なくなってきた」とも報告されている。コラージュ体験を積み重ねる中で、登校への戸惑いを乗り越える中での体験と類似した小さな挑戦を重ねていることになる。

(2) フルコラージュとの差異

「サイズが小さいために、作品から読みとれることも、より絞られるように感じた」、ストーリー化、他者の手法を取り入れて「全面貼りをする」「色合いを変えて・・・」等メンバー個々が繰り返し制作する中で、どのように制作するのか、意図を明確にもって臨んでいる。八つ切り判、B4判等のフルコラージュの場合は多くの場면을展開するので制作意図を絞ることが難しいと思われる。A5判法では、意図を活かす方向性に向けられ、新聞紙の中にどのような記事等が掲載されているか、その中で創造的な体験が伴っている。

(3) 新聞の使用

コラージュの切片の材料として新聞紙を活用している。入手しやすい新聞紙によることから材料の供給においてメンバーに不安を与えていない。女性誌、男性誌等の使用のような性をめぐるテーマに方向づけられることはない。今日の新聞はカラー写真、ロゴ等も使われている。広告もそのまま使用できるように手渡しているのでカラー題材中心の使用への可能性にも開かれている。

「その時の自分を思い出しながら」とコメントがあり、今回の諸作品で「トランプ大統領」「林修」「藤井四段」等々今時的な題材が登場している。季節の変化にも新聞の中で見て取ることができる。不登校者にあってその時々々の社会の話題に触れることができ、あまり学校に通っていないという自身の課題に侵襲的でない程度で勉強といった体験を提供している。

(5) 紙片の枚数

「えらび切り抜いた物を取捨選択して貼り付けた」「一番興味をもったもの、選びたいと思ったものを厳選する結果になった」等であり、新聞紙から様々な可能性がありながら、限定された枚数を短い時間で選ぶといった一枚一枚を大切に作る体験を提供している。

「柔軟な自由な発想から作業」「自分らしく好きなものばかり」といった体験もおそらく少ない枚数、時間が短い故に、さらに集団の中で他者との対比から体験を深化しているかに思える。

(6) シェアリング・グループの可能性

個別に制作したならば、しないであろう体験を集団場面に参加していることでお互いの作品の変化を、シェアリングとして批判・評価せずに、くり返し受けとめ続けることになる。そこで信頼感や、守られていると感じる安心、安全な空間が自然と生み出されているようだ。また、自分と異なるものを受け入れる、自分も取り入れてみる、という作業が、作品を通して抵抗なく行われている。

A 5判でまた枚数が少ない設定でのコラージュ制作から、小さなチャレンジを実現し、そのチャレンジを繰り返すことのでき、他者に説明・言語化しやすいために、無理なく制作、継続ができる。また、その制作中には自己との対話や、葛藤と向き合ったり、内的な作業もなされたりしている。台紙のサイズ、枚数の限定ゆえに、最初は制作に抵抗を感じていた場合でも「案外つくれてしまった」「そこそこの物が完成した」という達成感も味わうことができている。

このコラージュ制作に外在化されている体験は、まさに不登校となっている二人のC1が、その状態を乗り越える為に必要とされる過程となっているのではないかと考える。コラージュ制作をとおして、自らの課題として理解しやすく、抱えやすいと思われる。

今回のワークは大学院生とクライアントと

のワークであるが、現在、職場などでも、労働者がいきいきと働けるような取り組みが必要とされており、そのひとつの方法としてグループ・アプローチは注目されている。大脇(2007)は看護職の職場内エンカウンター・グループの体験としてコラージュ制作を行い、看護職者同士が新たな関係を構築するための一つの方法として有用であると述べている。

臨床心理センターでの活用、さらに他領域、他の利用者への活用に拡張すべく、シェアリング・グループの機序、効果についてさらなる検討を行ってゆきたい。

<引用文献>

- 石口貴子 2010 コラージュの継続制作における心理過程, 昭和女子大学生活心理研究所紀要 vol. 12 63-74
- 中島美穂 岡本祐子 2006 コラージュ継続制作における内的体験過程の検討, 心理臨床学研究, 第24巻, 第5号 548-558
- 大前玲子 2012 大阪大学教育学年報 Vol. 17 45-58
- 大脇百合子 2007 看護職者の職場内エンカウンター・グループにおける体験 -グループ参加者の気持ちの変化に着目して- 日本看護管理学会誌 Vol. 11, No. 1
- 斎藤環 2012 ひきこもりはなぜ「治る」のか? ちくま文庫
- 斎藤環 2015 オープンダイアログとは何か 医学書院
- 竹内いつ子ら 2015 集団でのコラージュ制作とシェアリングにおける参加者の気分変化と親和行動 川崎医療福祉学会誌 vol. 25 75-85